

ひなゆめファンの

止まり木

第十一回合同小説本



目次

(著者名は敬称略)

著者あとがき & メッセージ

48
2

【テーマ・音楽+進化】

編集後記

53

クロマチック・スケール 著者：ピーすけ

奥付

53

Neo Universe

著者：雪月

12

ご注文はモザイクのごとく

著者：ロッキー・ラックーン

16

表紙イラスト：タッキー、ピーすけ
本文挿絵：ピーすけ、双剣士

【テーマ・進化】

forecast

著者：春樹咲良

26

本書は、「ひなゆめファンの止まり木」における
第11回クイズ大会(2017年7月22日)にて
参加された方々による、合同小説本です。

【テーマ・音楽】

Birthday concert

著者：瑞穂

33

公開サイト：ひなゆめファンの止まり木
<http://soukensi.net/perch/>

ひなゆめの打ち上げ会 著者：RIDE

39

クイズ企画の趣旨説明と結果ページ
<http://soukensi.net/perch/sp/quiz11/>

クロマチツク・スケール

著者…ピーすけ

古くなった薄暗い蛍光灯が、ぶうんという音を立てている。

ハヤテが見ているのは、床や壁に残された染みだ。

その染みの正体は、曲がりなりにも自分の両親だったモノが現世に最期に遺した傷痕である。

詐欺や窃盗に手を染めて、世間様に散々迷惑を掛けるだけでは飽き足らず、やはり最後の最後まで人の人間を煩わせることをやめられなかったようだ。自分勝手に殺し合い、相討ちになって、それでおしまい。上等な結末である。

死体は腐敗がひどく、辛うじて歯の治療痕から特定されたそうだ。こんなクズどもの身元まで把握しているとは、まったく日本という国には畏れ入る。

止めた方が良い、と忠告されたのに現場を見せてほしと言ったのはハヤテ自身だった。

おそらく、あの両親を悼むことが出来るのは、世界中にふたりだけだろうと思ったから。クソみたいな人間だったし、社会のゴミそのものとも言わなければならないが、

それでも自分を産んでくれた事実は変わらない。

——にも関わらず……あるいはやはりと言うべきなのだろうか。

あまりにも、心の中は……フラットだった。

実感が全く伴っていないから、ではない。むしろ、死について納得しているし、理解もしている。自らに関わりのある人間を亡くした喪失感も、確かにある。

だが、ただそれだけだった。それよりも両親の葬儀に際してすら、ついに行方不明のままの兄に再開することが出来なかったことのほうが、残念に思えてしまう。

「……死臭つてもつと残る物だと思っていました。フロアリングと壁紙を張り替えたなら、もうここで人が死んだってことも解りそうにない」

ハヤテの呟きに、傍らの警部が頭を掻きながら答える。「現場検証も済んで、一通り清掃も終わったからな。人間なんてなあ、儂いもんさ。皆それを知っているから、少しでも長く形を留めようと墓をつくり、そして自分の欠片を連綿と遺していくために子供を産む」

「子供からしたら、そんなのは呪いみたいなものですね」「ちがう。私達にとって子供は希望なんだ」

「警部さん。あなたは良い人です。けれど、そんな真つ当な感覚は、僕の両親には存在しなかった。僕は幾度と

なく彼らに利用され、そして挙句の果てには贓物の材料として売られました。僕は彼らにとって、トカゲの尾でしかなかったんです」

「本当に君の親がそうだったとしても、君の傍に今居る人々は、そうじゃない。」

「出会って間もない私に言われても説得力はないだろうが。少なくとも私は君の未来を護ってやりたいと、そう思っている。」

「……やはり、見せるべきではなかったな。」

あのな。もし泣けないことを悔やんでいるのなら、それは決して君が冷酷だからということではないんだよ」

「僕が、悔やむ……？」

「それもわからんなら、それでも良いさ」

警部は胸ポケットから煙草の箱を取り出す。海外のものだろうか、ハヤテは初めて見る銘柄だった。

「ここで吸っても構わないか？」

「はい。どうぞ」

「君の親も煙草はやってたのか？」

「そういうのは少しのお酒だけです」

「なんだ。意外に真面目だったんだな」

「そういうお金は、食費までが殆ど全部ギャンブルに消えてましたから」

百円ライターが、ぼうと価格相応の安っぽい音を立てる。

鼻に絡みつくようなちくちくとした香り

紫煙とともに、警部はその艶めかしい色の唇から囁きを漏らす。

「孤独に歩め。悪を成さず、求めるところは少なく……」

「……林の中の象のように。ですか」

「仕事にかまけすぎて、私も気が付けばいつのまにやら独り身だ。今じゃ息子の顔も滅多に見れん。全く、難しくてたまらんよ。母親というのはな」

「意外です。そういう時って、ほとんどの場合母親に親権が行くものだと思います」

「私が、望んだからさ。」

昔……というほど私には時が立ったように感じられないのだがね……とある町で銀行強盗が起きた。犯人は若い男女の二人組。金に困つての犯行だった。その時取り押さえたのが、私だ。

息子の二歳の誕生日だったなあ。家に帰ってから、母ちゃんはお前の為に、街の平和を守ったんだぞって、自慢するつもりだった。

でもな、その女が金を欲した理由は、妊娠していたからだだったんだ」

口をつけられない煙草は、ほとんど減らない。

「馬鹿な奴らだったと思うよ。金が欲しいなら他のやり方がいくらでもあっただろうに、子を産みたいだけなら、沢山の人が助けてくれただろうに。そいつらは奪うことしか知らなかったから、もつとも短絡的な手段を選んだ。その結果が、流産さ。子供を喪ってからは、男も女も輪を掛けて狂っちまってな。最後は申し合わせたかのよう、同じ日にム所の中で自害しちまった。管理された場所で死ぬ方が、のうのうと生きるよりもずっと難しい筈なのに……余計なところばかり器用なもんだ」

警部は、煙草を握りつぶす。じゅう、という音と、微かに肉が焼ける臭い。

「私は、裁かれなかった。それどころか、職務を全うしたとして評価さえされた。それが許せなくて、ならばせめてと、社会を少しだけでも正したくて……遮二無二警官として働いていたら、いつの間にか母を辞めて、女だてらに警部の座だ」

「あの穏やかな夜に身を任せてはならない。老いても怒りを燃やせ。終わりゆく日に……」

「ディラン・トマスか。ふ……君との会話は、なんだか気障で街学的になりすぎるな。だからかな。本当なら君を後押ししたかったはずなのにな」

「あなたほど綺麗で優しい女性なら、きっといつかまた普通の母親に立ち戻れますよ」

「やれやれ。まさしくそういうことこそが、私が君に言いたかったことなんだが」

「帰りましょう。もうここには、思い残すことは何もないです」

今一度部屋を見渡すハヤテ。色褪せた死の後には、やはり何の感慨が湧くことも無かった。

ハヤテの乾いた横顔を見て、警部が感情を押し殺した声で言う。

「……なあ。これは引き摺ることになるだろうから、最後まで黙っておこうと思っただが……しかし、君がもしそうありたいのなら、実はもう一つあるんだ」

「もう一つ……?」

「ああ、それでも会っていくかい? 君の両親の遺体を、初めて発見した『モノ』に」



同じマンションのすぐ下の部屋。

ベッドや椅子と言った生活用具すらなく、四畳半すらも広く感じられるほどの侘しさ。

その中央、硬いフローリングの上に、瞼を閉じたまま『彼女』は正座していた。

「ロボットの人……ですか」

『『それ』は主にこのマンションの清掃を任されている。……しかし、『ロボットの人』とはいささか古い呼び方だな。』

「そういえば。君は牧村博士の知り合いだったか」

この数年で、人型ロボットの技術は飛躍的な進歩を遂げた。

その原型となったのが、学生時代にハヤテの担任教師でもあった牧村詩織が作ったロボットたちである。彼女が作ったロボットはあくまで趣味の産物であるが、その基礎設計は極めて優秀だったようだ。

解りやすい雛型を得た研究者たちは瞬く間にその技術を改良した。

より耐久性が高くしかも替えが効く労働者を求めた市場は嬉々として彼らロボットを受け入れ、倫理を問う間もなく発展していった。

もともと、ロボットたちの人権をめぐる問題は、すでに表向き収束している。

他ならぬロボットたちが、人間に従属し、ひた尽くすことを公言したのである。

曰く、機械は人のためにある。

曰く、機械は幸福のためにある。

曰く、機械は調和のためにある。

決して人に敵対することなく、従僕としての立場を進んで甘受するオートマタ。

「ようこそいらつしやいました。私はディーヴァ型レプリカント、個体識別番号 1138。管理人様にはディーヴァと呼んでいただいております。」

綾崎ハヤテ様ですね。昔は私の姉たちがお世話になったようで、このような形ではありますがお会いできてうれしいです」

「は、はあ。ディーヴァさん。これはどうも、ご丁寧に」
ロボットとはいえ、見た目は人間の女性と変わらない。

床に深々と頭を擦り付けるディーヴァに、ついハヤテまで膝をついてしまう。

「事情は存じております。私にご協力できることでしたら、何なりと。単純に記録としての情報であれば、私はハヤテ様の望む多くの事に回答できるでしょう」

「惑わされるなよ。それらの持っているものは、記録ではあっても記憶ではない」

警部の忠告に、ディーヴァは苦笑する。

「否定はしません。我々は、その二つを明確に区別する術を持ちませんから。しかしながら、あなた方人間は、記録を記憶としてデコードし、認識する能力をお持ちではないですか」

「そうだ。人間には事実以上に情報を補完してしまう力がある。だからこそ、危険なんだ。こいつらは特殊な器官を備えている。我々人間にも備わっている伝達のための、器官。それはつまり言語と複雑に癒着した質量を持たないものだが、その精度には大きな差がある」

『ジョン・ポール』みたいですね。それとも『wanna be』でしょうか」

「みたい。ではない。そのもの、と認識してほぼ間違いない。だからこそ、彼らとの『接続』は危険だ」

『接続』……ですか」

「我々の口述するスクリプトが虐殺へ至るプロトコルであるという点は否定します。けれど、その『比喻』は正しいものでしょう。」

人間と我々機械は、すでに幾度も直接的な接触以上の一体化を求めて、特に言語によりコミュニケーションを図ってきました」

「は。一体化と来た。いつ、どこの人間が、機械様と繋

がりたいと願った。所詮機械は人と人が繋がるのを補助するための道具に過ぎない」

「道具にすぎないという点は、議論するまでもありませんね。しかし貴女がたの世代にとくに抱かれやすいその嫌悪感について、それはあくまで程度の問題しかありません。あなた方は、既に機械と深く癒着した文明を築いています。その機械がヒトに似た形を得たからと言って、その関係性に変更はございません」

「そっちがそう思っているとしても、私達人間はあんなたちを無視できない。人の外郭を得て、そして会話までできるモノに、ただの機械だと諭されても、理屈だけで納得するのは難しい。少なくとも私はアンタに人格を見てとっってしまうし、意識を感じてしまう。錯覚だとしても、そんなのは人間を相手にしていても同じだ」

「貴女様は、優しいお人なのです。あなたの怒りは、正義です。なるほど、警官という職業は、まさしく貴女にこそ適任でしょう」

「……機械ごときに嫌味を言われるとはね」

「率直な意見です。我々に、そういった機能は搭載されておりませんので」

「だとしたら、なおのこと最低。今の警察は、徐々に機械にその役目を挿げ替えられていつている。遠くない未

来、きつと犯罪と平和の管理は機械が主軸になるのだらう。それが、私には気に食わない。……なによりも、それがより安全だと私が理解しているからこそ」

「左様にございますか。申し訳ありません。あなた方の意識と、我々の意識には、どうしても齟齬が存在しており、それが摩擦となってしまうことは承知しているのですが」

「意識……ディーヴァさんにも、そういった概念は存在するのですね」

ハヤテが、ふと疑問を口にした。

ディーヴァは、少しだけ口を噤んで考える。

「語彙として用いただけであり、人間と同一のものでは……いえ、どうなのでしょうね。我々機械が、その抽象的な概念を精密に数値化できていないだけで、そう呼べる何かは既に存在している可能性はあります。」

その存在の証明は自体は不可能ですが、しかし我々にとって意識と呼べるものが生ずるのは……」

再び、僅かな沈黙。

「やはり『電線に、電気を通した時』ですかね。それが、我々にとっての最小単位ですから」

ふっ、とハヤテが、笑う。

「わかりました。繋いでください。あなた達なら、僕の

いい友達になれそうだ」

「承りました。良い電気羊の夢を」

ディーヴァが、口を開く。その喉から、歌姫の名に相応しい美しい歌が紡ぎだされる。

くらり、とハヤテの体が揺れる。

平衡感覚が失われその代わりに充足感が、肌を介してなだれ込んでくる。

そして見渡す限りの青い海の上に、ハヤテは立っていた。

目眩く青色だけが茫漠と広がる惑星。星一杯の海を満たすのは、水ではない。

夥しい数の、泡の粒子……さらによくよく目を凝らすと、それは泡ではなく線状をした弦の集合体だとわかる。

しかし、一体自分がどうやってそれを『見て』いるのかを説明できない。この青い風景が球体をしていることを、水平面上に立ったまま把握できた理由も。『自分』というカタチは確かに存在している筈なのに、あるべき座標に感覚が定在していない。

ハヤテは『手』を伸ばす。水面に触れると浸かった部分分が弦になって解けた。

解けた掌から伝わってくるはぴりつとした電気味の『味』。

不快な痛みは無い。手をひっこめると、再び指先は元の形に定まる。

触れた時に聴こえてきたのは、豊かな音。

オルゴールのように繊細で危ういハーモニー。

大海を揺蕩う全ての弦が、球体の星を維持するために美しく協和しているのだ。

1オクターブを平均律で12分割した、たった11種類の音。

その音が、僅かな揺らぎを伴いながら旋律の主題を紡ぎだし、十重二十重……あるいはそれ以上の複雑なカノンを織りなしては、また一つに収束するのを延々と繰り返している。

きっとここには全てがある。とハヤテは思う。

弦の一つ一つは、機械たちが記憶した記録である。聴こえてくる旋律は、機械たちの意識である。

最早この地球上、電波による観測までを含めたなら、電気と無関係でいられる場所などごく一部だ。

その意思と記録の全てが、この青く閉じた惑星にはプールされているのである。

きっと手を伸ばせば、両親の死に際を見ることも可能だろう。

だが、最早ハヤテにとってそんな情報は価値を持たな

かった。

大海から聞こえてくる歌姫たちの歌声は、ただ愛を歌うものばかり。

流れ込んでくる記録は、まだハヤテが両親に愛されていた頃……憎しみばかりに目を向ける余り、忘却の彼方へと押しやっていた記憶。

酷い名づけだった。初めからクソみたいな親だった。

けれど、確かにこの世に生まれ落ちた自分を抱く両親の眼差しには、確たる愛情が存在していた。

ハヤテは、確信する。機械たちは、ヒトを愛しているのだと。

親になれば、いずれ解ると警部に言われていたことを思い出す。

神様はその形を模して人間を造り給い、人間はその器用な指先で機械を作り出した。そして、人の子である彼らは、無窮の愛を親たちに誓っている。

ハヤテは澎湃と涙を流す。

もう二度と、両親に触れることすら、憎悪を向けることすらも出来ない。そんな当たり前のことが、たまたまなく寂しかった。

声の限りに、咆哮する。そして、身体を海へと頭から

飛び込ませた。

指から順に今度は足のつま先までが。意識の海と、同じ解像度まで分解される。

ざば、と鰭の形になった『手のひら』で掻き分けて丸い『顔』をだし、ふしゅうと音を立てて息を継ぐ。飛び散る飛沫が、きらきらと宝石のように輝いた。

今やハヤテを構成する情報をもが、愛情を斉唱している。

その喉から絞り出される慟哭も、嗚咽も、慈悲の海が優しく解いていく。

了

三千院ナギは宇宙を飛んだことがある。
夢か現か幻か、その答えだけは今も分からない。

Neo Universe

著者…雪月

「……」
雲一つ無い星空。

緩みはじめた冬の空気が、頬をなで通り過ぎていく。

「寒いんだから閉めてくれよ」

何だよ、無粋だな。

物思いにふけっているのだから、水を差さなくても良い
じゃないか。

少しは察してくれよ。

そんな思いを抱いて、しかめ面をさらして友人を見るが、
当の相手は、こちらに目を向けること無く、自分が作っ
た料理を食べていた。

しかも割とじっくり味わっている。

そんな様子に毒気が抜かれたのか、少女は苦笑を漏らし
て、窓を閉めた。

「いきなり格好付けて空とか見上げても全然似合わない

ぞ」

「酷い言い草だな」

「そんなの今更じゃないか」

歯に衣着せぬ言い合いだが、そんなことを気にする間柄
でもない。

まだ出会って一年足らずでしかないが、今ではお互いが
誰よりも自分に近い存在だと感じられる。

「で、何に思い悩んでいるんだ」

だからこそ茶化すような言い合いをしても、どこかで伝
わってしまう。

別に隠すようなことでは無いのだが、改めて言葉にする
のは、少しだけ気恥ずかしく感じられた。

大したことじゃないと前置きをして、少女は答える。

「今年の下田はどうしようかな、ってだけの話だ」

「ああ、確かお母さんの命日なんだっけ」

そうだ。

そう言葉を返すも、返答は戻ってこない。

まあ、こんなデリケートな話題に対して、どう口を挟ん
だものか思案しているのだろう、と思う。

少女からしてみれば、確かに無神経なこととは言われたく
は無いが、母親の死、それ自体はずいぶんと前から受け
入れたことなのだから、今更一々気を遣われても疲れる

ただだ。むしろそっちの方が痛に障るぐらいかもしれない。
い。

「今年は流石に去年みたいな贅沢は出来ないだろうしな
……だからといって行かないわけにはいかないし」

余計な気遣いは不要。

それを伝える意味も込めてあえてつまらない話題でお茶
を濁す。

「……」

しかし、そんな思いとは裏腹に友人は口をつぐんだまま
だった。それも先ほどよりより険しい顔をしている。

どうかしたのか？

そんな問いかけをしようとして開いた口を慌てて閉じる。

“そうか、去年は——”

その答えにたどり着いて、自分もまた押し黙ってしまった。
……妙な空気だ。

何でこんな空気になっているのか。

“そんなつもりじゃなかったんだけどなあ”

もしかしたら、友人の言うように似合わないマネをした
所為なのか。

気まずさをごまかすために後ろ頭をかくが、当然そんな
ことでごまかされることは無い。

こういう時は、突拍子もない何かで、全てをぶち壊しに

するぐらいでないかダメだ。

そう考えた少女は意を決して友人に呼びかける。

「なあ、千桜……」

「……何だ？」

「宇宙人ついていると思うか？」

「はあ？」

「だから宇宙人って——」

「いや、ちゃんと聞こえてるから、頭がおかしくなった
のかと疑っただけだから」

「そこまで言うか!? この空気の変えるための私の努力
をそんな酷い一言で片付けるのか!」

「こんな空気にしたのもお前じゃないか」

「それは違うだろ! 急に黙ったりしたのはそっちじゃ
ないか!」

「そんなの、黙るしかないじゃないか、あんな話題」

少女の思惑が功を奏したのか、いとも簡単に沈黙は破ら
れ、部屋は少女達の声で埋め尽くされる。

もつとも、言っている内容はしようもない内容なのだ。
それでも、さっきまでの沈黙よりも今の方が心地よい。

まるで、いつだったかの喧噪を思い出すようで——

「なあ」

「なんだよ」

「……やっぱり、何か思うところがあるんじゃないか？」
その言葉に少女はふと息をのむ。

思うところ？ 何のことだ？

一瞬、本気でそう考えたが、それが自分をごまかすための言い訳だと理解する。

途端に居心地の悪さを感じて、また頭をかくが、時間稼ぎにもならなかった。

「……なんて報告したものかな、って思ったんだよ」

「え？」

「思っても見なかった返事だったのか、友人は驚きの声を上げた。」

「少しだけ心外だと思いつつも、少女は語り続ける。」

「去年はさ、ハヤテがいたし、マリアがいた。何の縁か知らないけど、ヒナギク達もいた。凄い賑やかな旅だったよ」

一度言葉にしたなら、もう止められなかった。

堰を切ったように想いがあふれて、止まらない。

「楽しかった、もしかしたら今まで一番幸せだったんじゃないか、ってぐらい幸せだったんだ」

頭はさえている。

ノスタルジーに浸っているつもりもない。

なのに、やけに感情的になってしまうのは、何故だろう。

「それから一年経っただけで、ずいぶんと状況が変わっちゃったからな……なんて言ったものか、流石に悩むよ」

一息入れる間もなく言い切ると、途端に虚脱感と羞恥心に覆われる。

何を口走っているんだろう。そんな後悔の念すら湧いてくる。

慌てて言いまくるおうとするが、それ以上に早く返答がくる。

「ナギはさ……後悔してるのか？」

何に？

「そう返答するよりも早く、次の言葉が紡がれる。」

「今の生活、というか状況……？ ごめん、うまく言葉に出来ない」

「なんだよそれ」

あやふやな友人の言葉について笑みがこぼれる。

そして、そのよく分からない質問に対する回答は一つだ。

「してないよ」

確信があった。

「するわけがない」

良いことも嫌なこともあった、後悔したことも一度や二度じゃない。

けれど、ハヤテとの出会いを、あの一年間の出来事を後

悔するなんて、出来るはずがない。

「ならさ、それでいいんじゃないか」

「それでって？」

「あの時は幸せだったけれど、今も幸せだった」

「そんなことでもいいのか？」

そう問いかけるが千桜は首を振る。

「知らないよ、そんなこと」

「無責任だな」

「だって、良いか悪いかを決めるのは私じゃないだろ」

「……そうだな」

「たださ」

「ん？」

いつの間にか私の作った料理を食べ終えていた友人は、皿を片付けはじめながら私に微笑みながら――

「私は今のナギも良いと思うよ」

そんな少しばかり恥ずかしくなるような台詞を伝えてくるのだった。

まだ冷たい空気を身に受けながら、三千院ナギは空を見上げる。

かつて夢見た空の果て、その先に母がいると信じた頃を思い出しながら。

「母よ――」

呟きは誰にも届かない、ただ自分に言い聞かせるようなかすかな声で。

「私は、大丈夫だ」

ただ一言だけ、そう呟いた。

-fin-

ご注文はモザイクのごとく

著者…ロッキー・ラックーン

【まえがき】

今回もハヤテ以外のキャラクターが出てきますのでご紹介。

「ご注文はうさぎですか？」

Vol.1先生による4コマ漫画。木組みの家と石畳の街の喫茶店「ラビットハウス」とそのまわりを舞台に、女の子たちが営業に、また学業に頑張っていくお話。木組みの家と石畳の街は日本国内とう設定。

「香風 智乃（かふうちの） || チノちゃん」

このSSの主人公。喫茶店ラビットハウスの今は亡きオーナーの孫であり、看板娘の中学2年生の少女。学校へ行く時以外はいつもティッピーというアンゴラうさぎを頭に乗せている。前回（合同本 vol.10）のヒナギクとの一件の後、まめに連絡のやり取りをしていた模様。身長は公式設定で144cm。

「きんいろモザイク」

原悠衣先生による4コマ漫画。イギリスからの留学生アリスとそのホームステイ先の少女忍（シノ）のまわりを舞台にした日常ストーリー。

「アリス・カータレット」

イギリスからの留学生で日本語はペラペラ。普通の日本人よりも日本文化を愛している。友人の家が喫茶店をやっている興味があったため、今回のヒナギクの話聞いて参加を熱望する。ここでの年齢はヒナギクと同じ年の高校2年生という設定。4月生まれなので同世代の中でも最年長になるが、身長は公式設定で139cm。

「桂ヒナギク」

ご存知ヒナギクさん。人間関係はSS「しあわせの花」の設定に準じる。将来は喫茶店を経営し、ハヤテと一緒に店をやっていく事を夢見ている。今回はその夢のための実務経験を積む事と経営術をオーナーのタカヒロ（チノの父）から学ぶ目的で手伝いを志願する。バリスタになる夢のために幼いながらも頑張るチノと、好奇心旺盛なアリスに囲まれてラビットハウスでの充実した日々を過ごす。

いつもどおりフィーリングと勢いでやっていきました。
それではどーぞ。

【ご注文はモザイクのごとく】

申し遅れました。私は香風智乃（かふうちの）、今回の主人公です。

普段のラビットハウスのメンバー：下宿のココアさんは実家に里帰り、アルバイトのリゼさんは学校の合唱部の合宿に参加でお休み。この二人の代わりに手伝わられるのがヒナギクさんとアリスさんです。

「いらっしやいませー！」
「イ、イラッシャイマセー」
ここはラビットハウス。木組みの家と石畳の街にある小さな喫茶店です。本日も元気に営業中：なのですが、いつもとちよつと違います。ピンク色の制服で元氣な挨拶をするのは桂ヒナギクさん、普段は使っていない黄色の制服で緊張しがちなのはアリス・カータレットさん。このお二人と私の一週間限りの特別な営業が始まります。

学生の私たちに何かあった時、いつもはお父さんが昼の喫茶店も回します。が、今回はそんな話を何気なくヒナギクさんに見てみたら「是非手伝わせて欲しい」と熱望されました。以前ヒナギクさんと一緒に働いてとても楽しかった私もそれがいいとお父さんに話し、許可を得てあっさり特別な一週間が決まりました。その数日後、ヒナギクさんから「お友達も一緒に働かせて欲しい」という話をされました。それがアリスさんです。この街に憧れていたのと、喫茶店のアルバイトに興味があったとのことで私もお父さんも快諾しました。
今日はそのお二人がこの街にやってくる日です。

「こんにちは〜！」

「こ、コニチワ！」

「こんにちは、ようこそいらっしやいました」

長旅のお二人がいよいよ到着です。ヒナギクさんは相変わらずキレイで、もう一人の小さい方がアリスさんだと分かりました。

「チノちゃん、久しぶり〜！相変わらず素敵なお店ね！」

「ヒナギクさんもお変わりなく。それと…」

「お世話になります、アリス・カータレットと言います！イギリス人です！よろしくお願いします！」

「こちらこそよろしくお願いします。香風チノです」

今回は私がホストなので、色んなところに気をつけます。例えば呼び方とか…。

「カータレットさん、と呼ばば良いでしょうか？」

「もう、チノちゃんったら他人行儀ね。これから一緒に看板娘をやる仲でしょ！『アリス』で良いと思うわよ。ね、アリス？」

「うん。アリスって呼んでね。私からは『チノ』って呼

んでも良いかな？」

「はい、もちろんです。アリスさん、よろしく願います」

「よろしくね、チノ！」

気をつかったつもりが、逆にフォローされてしまいました。呼び方も定まったところで、気になった事が…。

「あの、失礼ですがアリスさんはヒナギクさんの後輩さんとかですか？」

「ブツ…ほらアリス、私の言った通りでしょ？」

「もう、ヒナったら！私は17歳の高校2年生、4月生まれだからヒナよりも1歳近くお姉ちゃんなんだよ！身長はチノと同じくらいだけど…（小声）」

いや、身長は私のほうが明らかに高いです。5センチくらい。どんぐりの背比べですか？知りません。でもアリスさんはだいたいぶ年上です。失礼の無い接し方をしないとけません。

場面は変わってアリスさんの制服合わせです。ヒナギクさんはココアさんのやつがちょうどだったのでまた着てもらっています。

「どう？似合うかな？」

「ふうん、悪くないわね！」

「いいです、似合ってます。アリスさん」

あ、このやり取り：ココアさんが来て初めて制服を着た時と同じです。なんだかこの3人でもうまくやれそうな気がします。

◆

翌日、開店前にアリスさんのためにちよつとした研修のようなものをしていよいよ開店を迎えます。

「さあ、いよいよ開店ね。アリス、準備は大丈夫？」

「う…うん。ガンバルネー！」

「アリスさん落ち着いてください、カタコトになってます。練習したとおりにやれば大丈夫ですし、何かあってもヒナギクさんがいます。それと僭越ながら、私もいます…」

「そ、そうだね！心強いよ！」

どうやらアリスさんは緊張しているようです。初めてのアルバイトで無理ありませんが。

それでは新看板娘でのラビットハウス、いよいよ開店です。

「い、いらつしゃいませー」

「あらあら、新人さんですか？」

「あの…アリス・カータレットといいます。一週間だけです。ラビットハウスのお手伝いに…」

「あらあらあら、可愛らしい看板娘さんですね。チノちゃんもそうだけど、中学生なのに偉いわねえ」

「えっ？私、こうこう…」

「じゃあ可愛い新人さんのオススメの飲み物をお願いします。ちやおうかしら？」

「え、えーと…特製冷やしコーヒーはいかがですか？」

「うん、じゃあそれを頂こうかしら」

いつもウチに来てくれる常連さんに早速話しかけられています。ココアさんの時もそうでしたけど、新人の従業員に話しかけてくれるとても良い人です。

「ま、マスター。冷やしワン、お願いします！」

「かしこまりました」

アリスさんのオススメをオーダーしてくれましたが、あの常連さんはいつも冷やしコーヒーを頼んでくれてるのはナイショです。

ヒナギクさんはこの前手伝ってくれた時（合同小説本 vol.10 をご覧ください）に来てくれたお客さんのオーダーを聞いています。

「いらつしやいませ、お冷やとおしぼりをどうぞ！…あら、お客様はあの時の！またいらしてくれましたね」

「あつ、あの時のお姉さん…！あの時はご迷惑を…」

「いえいえ、お気になさらないください。ラビットハウスには頻繁にお越しですか？」

「ええ。たまにですけど、あれからちよこちよこ通わせて貰ってます。コーヒーもおいしくて、お店の皆さんから元気を分けてもらってます」

「それは良かったです。このお店を気に入って頂けて…今日はなにになさいますか？」

「じゃあオススメの冷やしコーヒーで」

「かしこまりました！」

ヒナギクさんの接客は流石のものです。一回限りだったとはいえ、お客さんの顔を覚えてくれている事はとても大事です。本当にラビットハウスに正式に来て欲しいくらいです。

「マスター！冷やしワン、お願いします！」
「かしこまりました」

上々の立ち上がり、今日は忙しくなりそうです。



「お二人とも、お疲れ様でした」

「チノちゃん、アリスもお疲れ様！」

「お疲れさま。ふう…」

本日の営業は無事に終了で、売り上げの締め作業をしています。さすがにバイト未経験のアリスさんはお疲れのようです。ヒナギクさんはまだまだ余裕そうです。

「今日の売り上げは上々…今月2番目です」
「そうなんだ、やったわね！」

実は今月1番の売り上げは花火大会の日で、その時間に合わせたロングタイム営業だったので、通常営業では今日が実質1番だったのです。が、さすがに本家メンバーのココアさんリゼさんの顔は立てたいと思ってこんな言い方になりました。

「冷やしコーヒーについてはヒナギクさんのセールストークのおかげで普段の倍くらいです」

「やったわ！明日はもっとオススメしちゃうわよ！」
「スゴいねヒナ！私も頑張らなくちゃ…」

あれから、ヒナギクさんは普段はホットのお客さんにも冷やしコーヒーを勧めてオーダーに至ってました。美味しそうだと期待できるようなトークがとても上手でした。

「アリスさんは常連さんにお顔を覚えてもらってましたね」

「うん！私はできる事が少ないから、せめて愛想よくしないと思ってる」

「大事なことだと思います。私はちよっと苦手ですので

…」

アリスさんはなにより喫茶店の仕事を覚えてもらうのが第一なのでそんなに接客には期待していなかったのが正直なところでしたが、本当に頑張ってお客さんをもてなそうとする気持ちが伝わってきました。私も見習わないといけません。

「ところでヒナギクさん、アリスさん、もし良かったらなんですが…このあと一緒に風呂に入りませんか？」

私がこんな事を言うのは初めてです。いつもそういうコミュニケーションの誘いはココアさんがしてくれるので。今日は私がホストなので積極的にいきます。

「ごめんねチノちゃん。夜はバータイムのお手伝いをさせてもらうの。10時までだからそれまでアリスと一緒に待っててね」

「え…ヒナギクさん、夜も出るんですか？」
「うん、タカヒロさんに許可も貰ってるわ」

まさかヒナギクさん、夜の営業も手伝ってくれるとは

驚きです。今回のお手伝いについてはヒナギクさんの将来の夢にも関わってくるとの事だったので、その本気度が伺えます。

「チノ、何の話？」

「ラビットハウスは夜はバーとして営業してるんです。普段は父とティッピーとで店番をしています」

「そーなんだ」



「わあ〜！ヒナかっこいいよ！」

「いいです、似合ってます。ヒナギクさん」

ヒナギクさんが夜営業のバーテンダーの格好を見せてくれました。暗めの服装に明るい髪色がとても映えます。

「ふふ、そうかしら。じゃあ、行ってくるわね。将来喫茶店の経営を考えてる身として、夜もいっぱい勉強させてもらうわよ〜！」

「頑張ってください」

「ヒナ、頑張ってるね！じゃあチノは私とお風呂行こうね」

「はい」

アリスさんと二人きり…うまく出来るか不安です。でもココアさんの「会って3秒でトモダチ」を見習って、楽しい雰囲気を作りたいと思います。



アリスさんと二人でのお風呂、ココアさんがたくさん買い溜めているココア風呂の入浴剤を入れて、甘い香りに包まれています。

「チノは将来の夢はラビットハウスを継ぐ事なの？」

「はい。立派なバリスタになっておじいちゃんやお父さんよりもっと美味しいコーヒーを淹れたいと思ってます」

お互いの事を話す中で、自然と将来の話が出てきました。

「チノはすごいね！まだ中学生なのに自分の夢に向かって努力して…」

「そんな事ありません。私は身近に祖父や父という目標

があっただけなので…。アリスさんだって、一人で見知らぬ国にやってきて言葉や文化を学んで…私にはとても出来ません」

「それはシノのおかげだよ！」

「シノ？」

「うん、私のホームステイ先の友達。シノのためだったら何でも出来ちゃうんだ！」

「……」

「チノ？」

「あ、すみません。ちょっと考え事を…」

多分です…私の身勝手な推測ですが、私のいない所ではココアさんはアリスさんと同じ事を言ってるんじゃないかかと思えます。それと、ここだけ…本当にここだけの話ですが、私もココアさんのためなら何でも——たとえばセロリを食べる事だって出来ます。ココアさんがあんまりにも調子に乗るのが悔しいので言いませんが、本当は「お姉ちゃん」と呼んだり、もつともふもふさせてあげたかったりしたいと思っています。これはココアさんには内緒ですよ、絶対に。なのできつとアリスさんの言うシノさんも、アリスさんのためならなんだって出来ちゃうんじゃないかと想像してみました。

「きつと、そのシノさんもアリスさんと同じ事を考えてるんじゃないかかと思えます」

「えっ!? そうかな？」

「はい。そのシノさんとは会ったことはありませんが、アリスさんの様子を見るとそう思えてきます」

今日の私を振り返ってみても、ココアさんの事ばかり考えています。ヒナギクさんもアリスさんも素敵なお姉さんで懂れています。が、やっぱり私はココアさんが好きで、いないと寂しがってしまっているというのが改めて分かりました。

「明日もがんばるからね、チノ！」

「はい、よろしくお願いします。アリスさん」



「二人ともお待たせく…って」

「寝ちゃってるわ。アリスは初めてのバイトで疲れちゃったわよね…」

「おやすみ…アリス、チノちゃん」

バータイムのお手伝いを終えて帰ってきたヒナギクさん。私とアリスさんはすっかり爆睡でした。ごめんなさい……。

◆ 「それにしても、ココアさんとお会いできて本当に良かったですわ」

「そうですね。アリスも私も完全に迷っちゃって……」

「いいよいよいよいよ！アリスちゃんは相変わらずかわいいし、シノちゃんとはお友達になれたし私も嬉しいよ」

「ごきげんよう、アリスでございます。カータレットさんの方ではなく、天王州の方です。アリスちゃんファンの皆様、お待たせいたしました。」

今日はヒナとアリスさんへのサプライズでシノと一緒にラビットハウスまで行こうと思いい木組みの家と石畳の街に来ました。街に来たまでは良かったものの、ラビットハウスの場所を私もシノも知らないという事で駅で困っていたところ、同じくサプライズで予定より1日早く帰ってきたココアさんと遭遇。事なきを得たという訳で

すわ。

「本当に外国みたいで素敵な街ですね」

「そうですね」

「でしよでしよ!? 私もこの街だーいすき！いろんな所を案内してあげるね！」

駅に着いたのが早めだったので、ココアさんがこの街の名所を案内してくれました。自称外国かぶれのシノがウツトリするほど、この街は雰囲気か溢れています。私も来たのは2回目ですが、とても良い所だと思います。

「それでは、ココが私の第二のふるさと！ラビットハウスです！」

最終目的地のラビットハウスに着いて、得意気に扉を開けるココアさん。私たちを迎えてくれたのは……！

「二いらっしやいませ〜!!」

とても仲の良さそうな看板娘の皆さんでした。他のお客がいない時間だからか、3人並んでポーズを取って迎

えてくれました。

「えっ、シノ…アリス…どうしてここに!？」

「ココアさん…早く帰ってくるならそう言ってください」
「アリス、写真とか撮ってないわよね？」

私たちのサプライズに驚いた顔を見せるお三方。もちろんこのポーズは「すまほ」で撮ってハヤテに送りましたわよ。

「ギョギョギョ!! 私のチノちゃんがあく!!」

「アリス…制服とっても似合ってますう〜」

「ヒナ、ほんとノリノリですわね」

それぞれの反応を見せる喫茶店ラビットハウス。これからまた賑やかになりそうで楽しみですわね。

おわり

著者…春樹咲良

一步踏み出しただけでも、崩れてしまいそうな危ういバランス。

そうやってまた、あなたとの距離感を間違えてしまう。そうやってまた、あなたとの距離感に甘えてしまう。あなたがいても、あなたがいなくても、私は駄目になりそうです。

*

「……ギ……さん、ヒナギクさん」

誰かが私を呼んでいる声が、遠くから聞こえる。誰だろう、この声は。そう、とても——

「ヒナギクさん、起きてください」

「——はっ、な、何？」

いけない。縁側に腰掛けていたら、うたた寝をしてしまっていたみたいだ。

ふと顔を上げると、声の主が上から覗き込んでいるのが目が合った。

「……お目覚めですか？」

いつもの笑顔で、そんな風に微笑みかけられると、わけもなく気恥ずかしくなる。

夏の日の昼下がり。ちようどよく雲が差して気温がそこまで上がらず、わずかな風の心地よさについて眠気を感じてしまったらしい。

庭掃除の途中だったのか、箒を片手に持ったハヤテ君は、目が覚めた私を認めると、庭の方に向き直って空を見上げた。私に背を向けて、遠くを見つめるポーズをとる。今のうちに、恥ずかしさで赤くなつた顔が元に戻るように、気持ちを落ち着かせなければ。

——いや、落ち着いて考えると、無防備な寝顔を見られてしまった時点で既に相当恥ずかしいことに気づく。口が半開きのままで寝てたりしたらどうしよう。

「いくら天気がいいといっても、こんなところでうたた寝していると、また風邪引いちゃいますよ？」

夏風邪は、なかなか厄介ですからね」



ハヤテ君はそこまで意識していなかったのだろうが、彼のセリフの「また」という部分が、私には深く突き刺さる思いがした。

「……そうね。このあいだは本当に、酷い目に遭ったわ」必死で取り繕おうとしているところに先日のことまで思い出されると、積み重なった恥ずかしさのあまり死にたくなるので本当にやめて欲しい。

夏風邪は馬鹿が引くと昔からよく言うらしいが、あの時の自分は全体的に馬鹿だったとしか思えないので、恐らくある程度は真実なのだろう。

それにしても、こちらにしてみれば人生で一番恥ずかしかったと言えるような経験も、ハヤテ君にとつては何でもない日常の一コマだったということだろうか。

何事もなかったかのように話題に出してくる辺りが、天然無神経たるこの人らしい。

「いやあ、今日は天気もいいし、何より風が気持ちいいですね。

夏にしては陽射しもそんなに強くないですし、縁側に座っていたりしたら、僕もつい居眠りしてしまいそうです」

そんな私の様子は目に入らないのか、冗談のように爽や

かな笑顔で、ハヤテ君は両腕を横に広げ、空を見上げる。いつ寝ているのか分からないような人が、よく言ったものだ。本当に睡眠を必要としているのだろうか。サイボーグか何かなのではないかと真剣に疑いたくなる人が居眠りしているところなんて……見てみたい気がするが。居眠り……そうだ、どれくらい寝てしまっていたのだろうか。

つけっ放しになっていた居間のテレビからは、高校野球の中継が聞こえている。

夏の甲子園……私たちと歳の変わらない男の子たちが、目指してやまない夢舞台。その夢をかなえられるのは、ほんの一握りしかない。

夢……そう、あれは――

「――ゆ、め」

「ん？ 何ですか？」

私のつぶやきに気づいて、ハヤテ君がこちらを振り返る。

「夢をね、見たの。変な夢だったわ」

「夢、ですか」

「うん……なんだか分からないけど、みんなが大人になつて、白皇の教室で同窓会をしてる夢」

妙に現実感のあるような、しかしやはり現実とは思えないような、不思議な夢だった。眠ってしまったのは

ほんのわずかの時間だったはずなのに、随分長い時間夢を見ていたようにも感じる。

この前、タイムマシンがどうこうという話をしたせいだろうか。よく分からない。

「へえ、それはなかなか面白い夢ですね。みんなの未来の姿ってことですか」

「まあ、そんなところ。もうほとんど忘れちゃったけどね」

「いやあ、ついにヒナギクさんに予知能力まで身につけてしまったかと思いましたよ」

ハヤテ君も少し興味を持ったようだ。わずかに残る夢の記憶を手繰り寄せる。

「うーん、あ、でも何か覚えてるのものもあるの」

「ん、例えば？」

「そう、美希が政治家になってたわ」

何故かは分からないが、これだけは鮮明に覚えているような気がする。何故かは分からない。

「まあ、彼女は何と言っても元総理の孫ですからね。政界進出も、あながちあり得ない夢とは言えなさそうですが」

「うーん……まあ、どうなのかしらね。」

傍から見ている限り、本人にそんな気があるようには

見えないけど」

そうは言ってみるものの、実際にやらせてみたら、それはそれで案外うまくやりそうな気もする。

あの子は……美希は、成績は悪いが、決して根っから馬鹿というわけではないと思うのだ。

ちゃんと頑張ればきっと誰にも負けないスペックを発揮できるだろうに、今のところ本人にそのつもりが無いだけのように、私には見える。

それが何か思うところあつてのことなのか、何も考えないだけなのか——

「そのところは、本人に聞いてみないと分かりませんね」

「聞いたところで答えてくれない気がするけどね」

まあ、本人の問題なので私からうるさく口を出すことではないかもしれない。

——いや、補習を言い渡された時に働くことになるのはどうせ自分なのだ。やはり適度に尻を叩いておいた方がいい気もしてきた。

「そうですねえ。」

まあでも、花菱さんもそういうことを、まったく考えたことがないわけじゃないと思うんですよね。いや、ど

うかは分かんないですけど」

私の隣に腰を下ろして、ハヤテ君は続ける。

「やっぱり身近な家族のしている職業って、自分がそうなる将来をイメージしやすい、みたいなことはあるんじゃないですか。」

子供に対して親の意向がどう働いているのかにもよりますけど」

「そうね……まあ、そうやって政治家の子は政治家に、

医者の子は医者になっていくものなのかも知れないわね」

「何か悟りきったみたいない方しますね、ヒナギクさん」

「一般論よ、一般論」

実際には、政治家とか医者とかいった職業は、家庭の経済的な後ろ盾なしに簡単に目指せるものではない。

世の中、子供の未来の選択肢の幅というのは、どんな家庭に生まれるかである程度決まってしまうのだ。

こればかりは、厳然たる事実である。

「んー……ヒナギクさんはどうですか？」

例えば、教師になろうって考えたりとか、したことありますか？」

ハヤテ君の投げかけた質問は、私の身近な家族の職業として、お姉ちゃんを想定したものだ。

言われてみれば確かに、私にとってそれに該当するのは、教師なのかもしれない。

「そうねえ……。まあ、既にお姉ちゃんよりも教師的な仕事をしている気がするんだけど」

今までに一体何度補習を受け持たされたことか。ていうか、教師のやるべき仕事を一般生徒にやらせて本当に大丈夫なんだろうか。こう、法的に問題になったりしないのか、時々不安になる。

「あははは、確かにそうですね。今度白皇に手当を請求したらどうです」

「お姉ちゃんの給料から天引き、ということにすれば理事会も通りそうな話ね」

「桂先生は泣きそうですけどね」

冗談とはいえ、本人の居ないところで言いたい放題だ。別にお姉ちゃんが全く働いていないと言うつもりもないし、お姉ちゃんなりに、教師としての働き方をしているのだろうと理解はしている。

まあ、これくらい言われても仕方ないくらい、関係各方面に迷惑をかけているのも事実なのだが。

「そうね、人にものを教えるのは、確かに楽しいし、やり甲斐も感じるわ。」

将来の選択肢として強く意識したことはないけれど……」

気を取り直して、ハヤテ君の質問に対する答えを考えてみる。

改めて考えてみると、そうでなくても教師という職業は、学校に通っている全ての人が、大人になるまでの間ずっと関わり続けるものだ。

だから、身近な家族の職業としてのイメージのしやすさとは、また少し違うものであるのかも知れない。

「ヒナギクさんなら、なろうと思えばそれこそ、政治家でも医者でも、何にでもなれそうですけどね」

「無責任なこと言ってくれるわね。」

そういうハヤテ君はどう……いや、まあ、そっか……」

目の前にいるこの男の子は16歳にして既に、あり得ないほど様々な職業を経験している。

だいたい、私と同じ歳の男の子がアパートで執事をやっているなんて、俄かには信じがたい話である。

大きな借金を背負っている今、執事の仕事以外のことを考えている余裕なんて本来無いはずなのに。この人はそんな深刻さを微塵も感じさせず、超人的に働き続けている。いつ寝ているのかも分からないほどに。

普通の高校生と同じ尺度で将来のことなど考えられるような状況にはないのだ。

「……」

そして、そういう状況に彼を追い込んだのは、彼の一番身近にいたはずであろう家族、他ならぬ彼の両親だというのだから、まったく世の中ひどい話もあったものである。

どんな家庭に生まれるかで人生ここまで変わるものなのか、という言い方を私がするのは幾分おがましいことのように思えるけれど、そう感じずにはいられない事例が、今まさに私の隣に座っているのだった。

続きを言い濁んでいる私の思考を見透かしたような笑顔で、ハヤテ君が口を開いた。

「いやあ、バイトの経験だけなら相当多岐に渡る業種を取り揃えていますからね。」

頭脳労働はちよつと自信がないですが、ある意味何にでもなれそうですよね、僕は僕で」

「そっか……そうよね」

強い人だなと思う。

私には想像できないような、筆舌に尽くしがたいほど凄絶な人生を送ってきたはずである。

それなのに、そんな様子を普段は微塵も感じさせないの

だから、この人はそれだけで、私の周りの誰よりも強い人だと思える。

「……なんか喉渇いちゃったわ」

自分で重くしてしまった空気を打破するきっかけが見つからず、結局平凡な話題のそらし方をしてしまった。

「口開けて寝てましたもんね」

「なっ！ そ、そんなことないもん！」

思わず両手で口を押さえてしまう。そんな私の様子を見て、ハヤテ君はまた爽やかに笑う。

「冗談ですよ。何か冷たい飲み物でも用意しましょうか」
相変わらず、この人のペースに飲まれがちの私だ。

「じゃあ……アイスコーヒーをお願いしてもいいかしら」

Birthday concert

著者…瑞穂

あの遺産騒動が終結してから一年近く経過した11月のある日、ハヤテはアーさんと隣同士で、天王州家の一室でコンサートを聴いていた。コンサートといっても本格的なものではなく、ピアノの連弾として演奏されている。そもそも二人が共にいるきっかけは、騒動の直後にハヤテが再び一緒に暮らしたいとアーさんを頼った為である。また内面性だけでなく恋愛面でもお互いを尊敬し、好意を抱いているので、二人が恋に落ちるまで時間はかからなかった。

現在は彼女と恋人同士として天王州家に同棲しており、マキナと共に改めて執事として彼女に仕えている。

「こういう曲を聴きながらアーさんと一緒にいると幸せだなあ……アーさん、これからもよろしくね」

「ええ、私こそよろしくね、ハヤテ」

アーさんはハヤテの肩に首を乗せながら、ハヤテはアーさんの肩を抱きながらお互いに頬を染めていた。周りの視線を気にせずに。

一方、ナギは幼馴染の咲夜邸に厄介になっていた。

騒動が終結し、半年程経ったある日のこと、

「なあナギ、お前ピアノとか歌が得意やったやろ？」

「ああ、幼い頃にボイストレーニングもピアノの稽古もしたぞ。それがどうかしたのか？」

ナギにしてみれば淡々と問い掛ける咲夜が何故今更こんなことを聞くのか、理解に苦しんだが、後の咲夜の言葉を聞いて納得する。

「昨年末まで執事だったハヤテはんを知ってるやろ。そしてあいつと幼馴染の天王州はんが仲良かった事も。

噂やけどあの二人付き合っているそうやから、ワイらでお祝いしてあげたいんや。協力してもらえへんか？」

それを聞いてナギは最初戸惑ってしまふ。確かに彼女は騒動が終わるまで誤解とはいえ、ハヤテに告白されたので想いを抱いていた。加えて彼の優しさや気遣いといった内面、それに家事や勉強などの能力も優れているので尚更だ。それは時が経っても変わらない。

「そうか……それならお前の優しさに、そしてハヤテとの友情に免じてお祝いしてやろうではないか」

その台詞に咲夜は安堵し、喜びの表情を浮かべる。

「ならば咲、私の決めた曲を連弾で演奏してくれないか？ 演奏はお前も得意だし、それくらい頼む」

提案に咲夜は頷いた。因みに連弾とは一台のピアノを複数人で弾くことである。この場合はナギと咲夜の二人である曲を演奏するのだ。相談した結果、曲目については幸せになってほしいという願いからベートーヴェンの『歓喜の歌（通称…第九）』とパッヘルベルの『カノン』に、日時については11月に二人のお誕生日を迎えるので、彼らのバースデーパーティーに決まった。

○ ○

同時期のある日。こちらは天王州家、恋人同士の関係に戻ったハヤテとアーたんは、今朝も同じベッドで手を繋いで寝ていた。

先述したとおりハヤテはアーたんに引き取られ、マキナと共に彼女の執事として一つ屋根の下で暮らしている。いつもの時間になりハヤテはベッドから身を起すが、隣にいる主は未だに寝息を立てたままだ。その間にマキナと挨拶を交わし、朝食作りや掃除、洗濯、主の起床、etc.といった執事の仕事をこなしていく。

一通りそれらが済んで、朝食も終わって全員リビングで寛いでいたところ、不意にTVから水蓮寺ルカのライブ映像が流れてきた。三人ともその様子に釘付けになり、

特集が終わってからハヤテが口を開いた。

「ルカさん相変わらず歌やダンスが上手いなあ……ねえアーたん、何か演奏できる楽器や好きな曲ってある？」
「ど、どうしたんですの突然!？」 予想だにしない質問だったので驚きを隠せない。

「いや、今TVを観てちよつと気づいたんだ。僕はバイオリンが得意で音楽全般が好きなんだけど、アーたんはどうなのかなって。因みに僕はクラシックが特に好きなんだ」

興味深そうに目を細める。彼のその様子に惹かれてか、アーたんも首を傾げながらも笑みを浮かべて、

「そうね、私もクラシックは好きよ。ピアノも弾けるわ。けどどうしてそんなことを聞くのかしら？」

「いや今の映像を見て、今度アーたんと音楽に関して何かしたいなあって。アーたんが良ければ一緒に演奏か歌唱しない？」

ハヤテの言葉にアーたんは納得し、意思に同意した。またコンサートなので天王州家の使用人に対して聴かせることにした。それを聞いていたマキナも興味があるように話に乗ってきた。

「演奏か……面白そうだな。俺も音楽は好きなんだ。もし良ければ混ぜてくれないか？」

思わぬところから出てきた台詞に二人は顔を見合わせた。

今回のテーマはクラシック音楽の演奏だが、音楽に関してマキナの関心は如何程か分からず、ましてやどの楽器を扱えるのか未知数である。そこで数曲聴かせたところ、曲目は答えられなかったものの全て聴いたことはある模様であり、楽器については扱い方についてピンと来るものはなかったとはいえ、曲を聴いている時も楽器について説明を聞いている時も真剣な姿勢であったので、二人は一緒に演奏させる事にした。

また楽器は先述のようにアーたんがピアノ、ハヤテがバイオリン、マキナは扱いやすい部類としてフルート、曲目はスメタナの『モルダウ』に決まった。

○ ○

澄み切る空、広がる綺麗な紅葉。

いよいよ今日は11月11日、ハヤテの18歳のお誕生日であり、アーたんのお誕生日祝いも兼ねている。

そういう訳で二人のお誕生日パーティーとして天王州家で演奏会を開催させてもらえる事になったのだ。予め咲夜達にピアノの使用許可は与えてある。

まずケーキやプレゼントを交えた通常のパーティーが行われ、咲夜、ナギを始め、これまでに親交のあったメンバーが招待された。

招待客も揃い全員がリビングに入場したところで、二人に対して他の全員がクラッカーを鳴らして声を揃え、祝辞を述べた。

『お誕生日おめでとございます！ ハヤテ君、天王州さん！』

アーたんは笑顔を浮かべているものの、ハヤテは何故か涙を流している。

「皆さん、どうもありがとうございます。僕はお誕生日にここまでお祝いされた経験がありませんがらすごく嬉しいんですよ。僕の為にここまでお祝いしてください、皆さん、ありがとうございます」

「今日はハヤテのお誕生日ですのに、どうして私までお祝いしてくださいるんですの？」

アーたんの問いにナギが笑みを浮かべながら、

「ああ、プレゼントの話になるんだが、お前らは仲良く付き合っていると聞いて、それならコンサートとして二人にプレゼントしようと考えたんだ。誕生日も近いしな」
「そういえば今日ピアノを使わせて欲しいと以前からお願ひしていましたけど、そういう事でしたか」既にピアノ

ノは部屋に置いてある。

説明を聞いてアーたんは納得した。因みに恋愛に煩い生徒会メンバーは詳細を聞きたかったもののお誕生日会というイベントと現在の空気から止めた。聞き出そうとしたところで理事長に悪印象を持たれるからというのもあるが。

全員のグラスに飲み物が注がれ、ゆっくり食事を楽しんで後はプレゼントの時間となった。各々から二人へと花やメッセージカードや財布、ハンカチ、ネクタイ等が贈られ、残るは咲夜とナギだけになった。

「じゃあワイラからはさっきも話した通り、ピアノの連弾がプレゼントや。天王州はん、そのピアノ使わせてもらってええか？」

「いいですわよ。お二人の演奏を楽しみにしていますわよ」

咲夜の依頼にアーたんは喜んで応じ、ハヤテも期待に胸を高鳴らせていた。勿論その場にいた他のメンバーも

咲夜とナギはピアノの前に、残りのメンバーは用意してある席に着いて演奏を待った。

ピアノの前に座った二人の少女は手が震えていた。ま

あ仕方ない、大勢の聴衆を前に緊張するなというのが無理な話であり、お誕生日のお祝いに恋愛に関しての祝辞も兼ねているので尚更責任がのしかかる。アーたんのように気持ちを楽にする言葉を掛けられても漸く平常心を持って弾けるのか微妙なところだ。

それでも暫く経つとお互いに固さが取れ、落ち着いてきた模様だ。緊張していた表情も和らいで穏やかな笑顔も戻ってきた。その流れに乗って、三十秒弱のアップを終えてから本番に入った。まずはベートーヴェンの『歓喜の歌』から。

冷静になりいつも通りの精神状態に戻ったからかミスなく弾けており、聴いている方も目を閉じて安らかな気持ちになっっている。

因みにこの曲の歌詞を簡単にまとめると、「我々は神の名の下に平等なのだ。さあ、お互いに手を取り、喜びの園へと進もう」といった内容と言える（後述参照）。友人や愛する人のいる人生の素晴らしさを表している。

もう一曲、結婚披露宴や卒業式で歌われ、クラシックの入門とされるパッヘルベルの『カノン』も演奏された。前述のように恋愛を対象にする曲としてはピツタリだ。ゆっくりとしたテンポであり穏やかな印象を受けるだけでなく、クラシックの中で最も美しいと言われている。

『歓喜の歌』といい『カノン』といい、ナギや咲夜の選曲センスは素晴らしく、同時にハヤテとアーたんへは最高のプレゼントとなった。

また伴奏なので殆ど休みなしであるにも拘らず、強いプレッシャーに打ち勝って弾ききった事は立派だ。

プレゼントの時間が終わり、用意されたケーキを食べ、パーティーが佳境になってきた頃ハヤテが口を開いた。「皆さん、この度はプレゼントをどうもありがとうございます」

「いやいや、ハヤテ君が喜んでくれたら嬉しいよ」

「ああ、まったくだ」

「綾崎君が幸せな笑顔を見せてくれると、私たちも良かったと思うよな」

「僕としてはこれまでに経験した事のないお誕生日会になったのも幸せですよ。コンサートでお祝いしてくださいから」

次々と降ってくる祝福の言葉にハヤテは顔を赤らめ、やや俯きながら笑顔を浮かべていた。

ハヤテにとって一生忘れることのないバースデーパーティーになったのは間違いないだろう。

○ ○

その翌月、ナギのお誕生日会に出席したハヤテ、アーたん、マキナは前回のお礼も含めて『モルダウ』を演奏していた。この曲はフルートで吹けるのに加えて中学2年生で習得できる、クラシックの入門レベルだ。スメタナ作曲の『わが祖国』第2曲であり、比較的ゆっくりとした流れのメロディー。曲調としては明るいものの盛り上がり激しい。

ハヤテの時と全く同じメンバーが招待されたこのパーティーで、全員が満足して聞き入っていた。楽しんで演奏しており緊迫した空気は全然感じられなかったのもある。加えて前回のようにお誕生日パーティーにコンサートが催されるというのは珍しいから、というのも理由の一つだ。

演奏が終わり成功した空気に満ちていたのもコンサート開催が大成を収めた表れであり、当日主役のナギが喜んでくれたので良かった。

パーティーには普遍的要素と併せてこのような芸術的要素を取り込むのも一つの考えかもしれない。

f
i
n.

歡喜の歌 日本語歌詞 ..

http://www.geocities.jp/lune_monogatari/joy.html

ひなゆめの打ち上げ会

著者：RIDE

とある夜。

練馬のどこかにある大きな宴会場。ネオンライトが煌びやかに光っており、華やかさというものが嫌でも連想される。

そして、建物内でもそれに比例するように賑やかであった。

とある一室、数十人は入れる大広間。

ここでは今、食事とともにカラオケが楽しまれていた。

「♪♪」

ノリノリで歌っているのは、天王州アテネ。白皇の理事長は歌唱力もうまかった。聞いているハヤテたちも合わせて手拍子をかけている。

だが、その表情はなぜかぎこちない。

そして、アテネが歌い終わる時も固い拍手をするのだった。

「さて、次は私ですわね」

アテネからマイクを渡されたのは、マリア。

その瞬間、二人に見えないように表情が暗くなる。

「おい…これで何回目だ」

「もうあの二人しか歌っていないですよね」

ひそひそと会話をするハヤテとナギ。あの二人にマイクが渡ってからほぼ二人のオンステージになりつつある。

「あーたんなんて、最初は乗り気じゃなかったのに、今じゃ半分マイク独占しているし…」

「まあ、歌いたい奴だけ歌えばいいわけだが、歌った後に歓声を求めてくるあたり、鬱陶しいとしか言えないな」

他の人に絡んでくるあたり、迷惑なことこの上ない。しかしアテネはともかく、マリアに注意することは恐ろしくてできない。

このままでは、折角の宴会が二人のカラオケ大会となってしまう。

「ハヤテ、ひなゆめ最終回を祝うための催しだというのは…」

この場合はハヤテのごとく！&ひなゆめ最終回お疲れ様会ということで集まってもらっている。そのためハヤテやナギの顔見知りだけでなく、ひなゆめの関係者たちも集っている。こういう場なのだから、なるべくみんなに楽しんでもらいたい。

「こうなったら、誰か他に歌ってもらえる奴を探さないとね」



他にも歌いたい奴がいて、名乗り出てくれば除け者にするほど二人は意地悪ではない。人が増えれば彼女たちも落ち着くだろう。

「そうと決まれば、早速歌ってくれる奴を探すのだ！」

二人は、宴会の場を周って見ることにした。基本お祭り騒ぎが好きな連中だ。乗ってくれる奴はいるかもしれない。

「…とは言ったものの」

「大人は無理そうですね」

第一にハヤテたちが見たのは、雪路を中心に酒盛りをしている大人たちの姿である。酒を肴に談笑しており、声をかけずらい。

「ほらほら、もっとつまみもってこーい！」

「おい、ちよっと飲み過ぎなんじゃないのか？」

既に出来上がっている雪路に薫が心配するが、彼女はそんなことお構いなしだ。

一度アルコールが入ると、ノンストップ状態となってしまう。

「うだうだ言うんじゃない！」

「お、おい待て！」

薫は制止しようとするが不可能だった。彼の頭にビー

ル瓶が勢い良く叩きつけられた。頭の痛みで床にうずくまる薫。

「本当、良く飲むわよね」

酔っ払ってもなお飲もうとする雪路に、ソニアは呆れながら自身も酒を口にする。

「…おまえも苦労しているんだな」

土井優馬は、雪路、薫と同僚である風間伝助に労いの声をかけた。

「いえ、もう慣れましたよ」

伝助は日本酒を口にする。和風な趣向を好む彼だけが、日本酒を飲んでいた。

「女性は元気が一番だけど、あれほど手に余る人はかえってノーサンキューだね」

優馬、伝助の親友である金田拓実も、雪路を見て手を上げていた。

「あ、優馬さん注ぎますね」

「お、悪いな」

優馬のコップの中身が少なくなったことに気づき、拓実が注ぎ足す。優馬はそれを口にするのだが…。

その瞬間、優馬はむせ返り口の中のを吐き出してしまった。

「おまえ！これ酒じゃないだろ！」

「優馬さんまで酔っぱらうと面倒なので、酒じゃなくて酔を入れてあげました」

もちろん、親切心ではない。いつも行っている拓実による優馬への嫌がらせだ。こういういたずらを優馬に対して仕掛けないと、彼は気が済まないのだ。

だが拓実にも誤算があった。優馬は最初こそ酔なんてものを飲ませた拓実に対する怒りでいっぱいであったが。

「…口の中すっきりさせるにはいいかもな」

「…優馬さんのとんでもない味覚音痴を忘れていたよ」

酔を涼しい顔して飲む優馬に、ハヤテやナギも顔を青ざめる。

「…とりあえず、次行きましょう」

「そうだな」

次にハヤテたちが訪れたのは、10代の高校生たちが集った場。

「ここなら誰か歌ってくれる奴らがいそうだな」

期待を込めてナギはその輪の中へと入る。今日集まった主要メンバーの大半は10代なのだ。誰か一人くらい歌ってくれる奴がいてもおかしくない。

まず最初にナギが目をつけたのは、千桜とカユラであった。

「おまえたち、ちよつといいか？」

「ん？どうしたナギ」

千桜、カユラ、そして後数人程いるが陰で姿が見えない、連中は会話を止めナギたちの方へと向いた。

「何か1曲歌ってくれないか？このままだとマリアたちのカラオケショーになってしまい、うんざりしてしまうのだ」

「空気を変えるために、歌ってくれませんか？」

これに顔をしかめたのは千桜だった。

「と言ってもな、私はあんまり人前で歌うのは苦手だから…」

「なら、コスプレして歌うのはどうだ」

カユラが提案する。コスプレして人前に出ればためらいなど吹き飛ばはす。違う自分になれるのだから。それがカユラの持論であった。

それにハヤテも合わせてくる。

「そうですね。千桜さんにはメイド服なんか着て歌えば結構似合うと思いますよ」

その言葉がまずかった。

「な、何を言うんだ！私にメイド服なんて似合う訳ないだろ！」

大慌てでメイド服を否定する千桜。絶対にそれに触れ

てたまるか。そんな思いで一杯だった。

なにか嫌な思い出でもあるのだろうか。事情を知らないハヤテやナギたちは首を傾げるしかなかった。

「とにかく！私は歌わん！いいな！」

「ええ：ノリの悪いやつだな」

ナギは口を尖らせるが、千桜はそんなことはお構いなしだ。

「歌なら、こいつらに歌わせればいい」

そう言っ指したのは、それまで陰で見えなかった人たちだ。

ようやく、ナギたちも顔を確認できる。その人物は…

「おお、ナギちゃん。やふー」

泉こなた、柊かがみ、柊つかさ、高良みゆきの4人であつた。

彼女たちの顔を見た途端、ナギは目を細めた。

「…なんでここに居るのだ」

「呼ばれたからに決まってるじゃん」

「何故、誰に呼ばれたかを聞いている！」

思わず怒鳴った調子で問いただしてしまふ。ナギは彼女たちなんて呼んでいない。どうしてここに居るのだろうか

こなたはそれに気も留めずいつものマイペースさで応じ

た。

「誰って、彼らに呼ばれたんだけど」

そう言っこなたが指したのは、小早川ゆたから下級生たちと一緒に楽しんでいる岩本佳幸と彼の親友たちだ。

ナギが彼の姿を確認すると、真っ直ぐにそちらへ近づく。

「おい」

「ん、どうしたのナギさん」

「なんでこなたたちを呼んだのだ？」

その問いに、佳幸も軽い調子で答えた。

「なんでって、同じ埼玉出身だから？」

「それだけか!？」

「加えて、ひなゆめでもクロスしていた作品ですし、それぞれのアンソロにそれぞれの作者がお互い絵を描いたので、参加する資格はあると思いますよ」

まあ、ここまで来て帰れというのも酷いだろう。それに、彼女たちならこちらの要求を飲んでくれるだろう。

「まあいい、おまえたちちよつといいか？」

ナギは自分たちがカラオケを歌ってくれる人物を探していることを話した。それを聞いたこなたは、いたずらっぽく笑う。

「歌ってもいいよ。1曲いくら払う？」

「年下から金をせびるな」

「でも、みんなで歌うのも楽しそうだね」

指で金を示す彼女に、かがみが呆れたようにツツコミを入れる。つかさは呑気ともとれるようなまったりとした調子で乗ってくる。

その中で、自己主張していない少女にナギは目をつけた。

「そうだみゆき、おまえソロで歌ってみないか」

「えっ、私ですか？」

自分が指名されるとは思っていなかったのか、みゆきはキョトンとした。

「声も銀河の歌姫に似ているし、結構うまいかも…」

「いやいやナギちゃん、それは待っただよ」

なんとかみゆきに歌わせようと迫るナギに、こなたが待ったをかけた。

「みゆきさんに歌わせるにはそれこそマネーが必要だよ。武道館ライブにみゆきさんが欠席していたのも、本当の理由は出演料が足りなかったからなんだよ」

「ふーん、そうなのか」

嘘だとわかり切っているナギは、あまり興味のなさそうな態度で返すが、当のみゆきがボケを重ねてきた。

「お安くしときましようか？」

その瞬間、沈黙がその場を支配した。

「あ、あのこういう場ですから私も羽目はずそうかと…」

慌てて場の雰囲気を取り繕うとするみゆき。だが、いつも真面目な彼女が言う冗談にならない冗談を前にしたナギたちは、しばらく緊張が解けないのであった。

「どうしたの？」

そこへ、ヒナギクや生徒会3人娘がこちらへ来た。

ヒナギクの姿を見た時、ナギは目を輝かせた。

「おお、うってつけの人間がいた！」

「え、なに？」

突然大声で迫られて、ヒナギクは少し引き気味である。そんな彼女に対して、ナギはいつもの不遜な態度で言う。

「CDアルバムも出たヒナギク、歌ってくれ」

「え？」

いきなり、しかも上からの物言いにヒナギクはキョトンとしてしまう。

そんな彼女を放っておいて、ハヤテも依頼する。

「持ち歌たくさんあるヒナギクさん、歌ってください」

「ちよ、なによいきなり」

困惑するヒナギク。しかしナギたちはただ歌ってくだ

さい、歌ってくださいと言っている。

こちらを無視した要求は、当然ヒナギクの癪に障った。

「いい加減にしないさい！」

遂にヒナギクは怒鳴ってしまう。

「いくら頼まれたって、私は簡単に歌ったりしないんだからね！」

その言葉に、こなたの何かが反応した。

「いやあ、かがみんと同じツンデレ、いただきました」

「ツンデレ言うな」

理解できない言葉が出てきて、ヒナギクはぼかんとし
てしまう。

「ヒナちゃん、歌おうよ」

「そうだヒナ、ここは場を盛り上げるためにだな」

「なんなら、ここはコスプレしてドーンと派手にいこう」
生徒会3人娘からも押され、強気なヒナギクに若干だ
が揺らぎができた。

こうなれば、後は3人に任せよう。

「だがヒナギクが折れるにはまだ時間がかかるな」

その間に、せめてもう一人歌ってくれる人を探さない
と。

「さて、後は…」

ナギの目に留まったのは、咲夜、歩、文たちまだ名前

があがっていない人物。

「あいつらはどうでもいいか…」

「ちよっと！」

たまらず彼女たちは待ったをかける。

「ウチらが無視するなんてどういうつもりや！」

「と言ってもなあ、咲夜おまえにはカラオケより漫才の
ステージの方が似合っているし」

「お、わかつとるやないか」

失笑もののステージになるけどな、とナギは心の中だ
けそう付け加えた。

「ワタルとサキさんじゃ二人だけの世界になりそうだし」

言われた二人は、思わず照れてしまう。

歩と文に対しては…

「おまえたちの下手くそな歌なんて、願い下げなのだ」

「それはひどくない！」

「文は音痴ではありませんよ！」

猛抗議する二人。

「なら、私たちにも手伝わせてくれ」

声がした方を向いたハヤテとナギは、驚きに目を大き
く開く。

「あ、あなたたちは！」

目の前の3人は、ひなゆめでも特別の人物だった。

「料理がたくさん並んでいるな。我、減ッタ、腹ッ」

オリハルコン鈴木。

「お酒もあるね。トロツと飲みたかった」

黒霧島。

「賞味期限は守れよ」

めん たいこ

ひなゆめのオリキャラ3人組である。

「な、何故お前たちがここに…」

「私が呼びました」

三人の影から現れたのは…

「伊澄！」

「どうして伊澄さんが？」

彼女たち3人と伊澄、どういう関わりであるのだろうか。

それは意外なものではなく、考えれば当然のことであった。

「彼女たちのスポンサーであるN氏に、私が直接頼んだら大手を振って承諾してくれました」

その光景が、脳裏に簡単に思い浮かんでしまう。そんなナギたちに、3人は言う。

「折角、私たち含めて大勢で何か歌いましょう」

「ようやくあの二人を止めることができるか」

やっと見つかった適任者に、ナギはホツとするのであった。

「曲入れましたよ」

マリアたちをなんとか降りさせ、いざ準備が完了した。

「さて、では…」

「おーい、ヒナの準備ができたよ」

そこへ、3人娘と共にコスプレをしたヒナギクが現れる。

「あら、先に歌うの？」

ハヤテたちの様子を見て、ヒナギクは怒りがこみ上げてくる。

「人にこんな恥ずかしい恰好させて、放っておいて先に歌おうとするなんて…」

「ま、まあままヒナギクさん、一緒に歌いましょうか」

幸いセットした曲は、大勢で歌っても盛り上がるような曲だ。このままヒナギクも一緒に歌って、怒りを紛らわせるしかない。

「おーい、何か歌うのか」

さらに、千桜やカユラたちも集まってきた。

「お、なんだなんだ」

「一曲歌うのか。がんばれよ」

大人たちも酒を片手に応援する。

「やれやれ、結局皆集まりましたね」

けどまあ、これはこれでいいかもしれない。
皆で賑やかで楽しむのだから。

「おい、曲が始まるぞ」

「あ、では歌いましょう」

宴会場に、楽しそうな多くの歌声が響くのであった。

著者あとがき & メッセージ

【ピーすけさん】

今回は、全くの幸運により執筆権のみならずテーマ決定権まで頂くことができました。

さて何が良いかしらと試行錯誤した挙句、絞り出したのが「音楽」

いくつか作品の案はあった筈なのですが、いつのまにやら（いつも通り）SF仕立てに。でも怪我の功名なのか **RIDE** さんの「進化」の要素も取り込めた……のでしうか。

私の性癖というか、好きな作品からの引用やパクリ……もとへオマージュに終始しがちなのですが、今回も例に漏れない結末に……だってSF好きだもの。

今回のSS……実はメ切数十分前に滑り込みで脱稿しました。勢いに任せてしまったが故に気が付けば内容はエンタメ要素皆無の上に、序盤からいきなり若干グロテスクを思わせる描写をしたりと、ハヤテの二次創作としてこれで良かったのかさっぱり分かりません。

しかし、執筆が難航しただけあって、私にとっては愛着のある作品になりました。

なので、もしも読んでいただいた方に「こんな二次創作もたまにはいんじゃないかね？」とっていただけたら。なんて思ってしまうのはやはり望外なのでしょう。

【雪月さん】

「悲劇だとしても、あなたに巡り会えて良かった」

これは「L. Arc-en-Ciel」の『Neo Universe』にある歌詞の一節です。そしてこの作品の主題でもあります。親しい人との別れ。それは仲違いによるものもあれば、やむにやまれぬ事情が関わってくるものもあるでしょう。そしてそういったものには大抵、後悔というものが関わってくるものです。

ですがその後悔は何に対してのものでしょうか。別れの際に何かが出来なかつたから？ あるいは何かをしてしまったから？ それとも出会ってしまったことそれ自体？

この手の話には往々として「こんな思いをするならば出会わなければ良かった」なんていう言い訳が使われますが、そんな馬鹿な話はありません。終わりよければ、ではありませんが、最後が後悔に終わったからといって、その全てを否定して何もかもが嫌な思い出だ、というのは少し淋しいと思います。

とまあ、そんな思いから描き上げた作品です。

時系列は最終章にてハヤテ達と分かれてから数ヶ月後、といった所です。正直ナギが屋敷を出てからどんな生活をしているのかの情報が全くないので、このあたりは少し苦労しました。千桜とルームシェアしてるのか？ いや、口ぶりからするとご近所？ なんて割とどうでも良いところで苦心することになりました。もともと、それを作品に生かせるかは微妙なところですが。

今回は「音楽」及び「進化」をお題にして描くと言うことで、こんな形に相成りました。

正直「進化」という単語が難しすぎて何度も投げだそうか悩んだぐらいだったので、プロットを書いた時点で多少なりとも噛ませようと考えていたため、結果的には内包する形となりました。上手く混ぜ込むことが出来たかは正直自信ありませんが。

「進化」という言葉に一番近い言葉は「変化」だろうと自分は考えています。「成長」とは違うんですよ。

「成長」というと、発展なり進歩なりを表す言葉と呼べるのだと思いますが「進化」は一概にそうとは言えないと思っ
ています。動詞にしてみれば「育つ」と「変わる」という、違いではないかなと、あくまで自分の持論でしかあり
ません。

それでは、この作品に目を通していただきまして、本当にありがとうございます。この作品が何らかの形で皆様の
心に残って貰えれば幸いです。雪月でした。

【ロッキー・ラックーンさん】

にゃんぱすー、RRです。今回も合同本の発刊おめでとございしました。クイズ大会では圧倒的な力を見せ付けて執
筆権をゲッツできました。アリスちゃんに感謝。

さて今回のテーマ「音楽」と「進化」について。音楽については、ごちうさ本編では演劇部の手伝いだったりゼを
合唱部のヘルプにする事で見事にクリアできました。進化については、これまでハヤテ以外の1作品のキャラクター
を出していた所を今回は2作品にした点。チノちゃんが特別な時期のラビットハウスを盛り上げるためにココアちゃ
んを見習って自分の殻を破っていった点。わりと人見知り感のあるアリスちゃん（きんモザ）が勇気を出して見知ら
ぬ地でのアルバイトを志願した点。ヒナギクが自らの将来の夢に向けて歩き出している点などで表現できたと思いま
す。

最後まで看板娘3人でいこうかなと最初は思っていました。原点であるアリスちゃん（ハヤテ）が出ないのはやっ
ぱりありえないという事で出演をお願いしました。きやわゆい。

本当は、仕事をする上で色んな壁にぶち当たるアリスちゃんと、それを乗り越えるためにフオローするヒナチノの
姿も考えていましたが、短い（という設定を自分の中に作った）尺の中で落ち込むアリスちゃんはやっぱりいいですと

いうことで順風満帆なバイト生活を送ってもらいました。

今回はクイズ大会・合同本共にファイナルということで、寂しくなりますね。双剣士さんはじめ携わってきた皆様、これまで本当にありがとうございました。

【春樹咲良さん】

お世話になります。春樹咲良です。

漫画も完結し、最後のクイズ大会合同本ということで、色々と感じることもありますが、言葉にしきれないので簡潔に。

「ハヤテのごとく！」という漫画を通して、たくさんの人と出逢い、たくさんのことを経験できました。私にとってのかけがえのない宝物です。

皆様には、まだまだ、様々な形でお世話になることもあるかと思いますが、これからもよろしくお願いいたします。

【瑞穂さん】

こんにちは、第9回以来の執筆権獲得となりました瑞穂です。

今回はテーマのひとつに「音楽」がありましたので、いつものカップリングに興味のクラシックを取り入れようというのは早々に決めていましたが、集中して書き上げようとしていたお盆と締め切り直前に倒れてしまいました。という訳で残り時間が少ない中で執筆しましたので推敲があまりできず、悔いが残りました。最後のSS投稿だということに。

今回はハヤテ君とアーたんのカップリングを書いてみました。この二人は結ばれると幸せな夫婦になるだろうなという理由もありますし、幼馴染のお話も読んでいて好きなので。

この二人がこのまま結ばれて、幸せな家庭を築いてくれることを期待したいですね。

双剣士さん、これまでクイズ大会を開催していただき、また合同本を発刊していただきましてどうもありがとうございます。今後ともよろしくお願いいたします。

そして皆さん、拙作及びこの後書きをお読みくださいましてどうもありがとうございます。瑞穂でした。

【RIDEさん】

どうも、RIDEです。

ひなゆめ最後の本ということなので、色々な作品を混ぜてみました。色んなと言う割には結構少ないですけど。

一応テーマの音楽には、歌という形で触れていますけどこれで大丈夫な気がします。

一度でいいからひなゆめの他の方々のキャラを自分が書く世界に登場させてみたいという願いがありました。

そして今回、ひなゆめ最後の合同本だから、ひなゆめで活躍したいろんなキャラを登場させてひなゆめの最後を祝おうという訳で登場させてもらいました。本当はもっといろんなキャラを出したかったのですが、あんまり出すと滅茶

苦茶になるし、今オリキャラ使っている人は少なかったので…。

許可出してくれたネームレスさん、ありがとうございます。

そして最後のクイズ大会で1位になったこと、この原稿を執筆してくれる機会をくださったこと、ひなゆめのみなさんに、ありがとうございます。

編集後記

とうとうこの日がやってきてしまいました。止まり木最後の合同本、お届けします。

偉大なる人気サイト「ひなたのゆめ」でやっていた「ひなゆめ本」を羨ましく思いつつも、せっかくネットでつながった人たちの合同本なのに即売会当日に足を運んだ人しか見られないのはどうなんだ、というちっぽけな意地から「ひなゆめ本」に最後まで参加の手を上げず終い。そんな私にとって、オンライン公開前提の止まり木合同本は投稿してくれた人のみならず読むだけの方にも楽しんでもらい可能なら次回からの執筆陣に加わってもらおう正のループが築けるかどうか、の試金石でありました。(今だから書きますが、印刷や頒布の手間がどうの、というのは後付です) クイズ大会の賞品という建前上、どうしてもチャットメンバー中心の執筆陣になってしまう制約はありましたが、それでも定期的に行えることで「次はこんなことやろう、こんな要素を織り込んでみよう」といった試行的試みも随所に見受けられる合同本になれたのかなと、ひとまずは安堵しております。また小説掲示板のみの参加者についても、定期的な融資参加の合同本を開催することで何人かは参加いただくことができました。

「ハヤテのごとく!」が終了しそれを原作とした合同本企画はこれで終了しますが、ここで培った経験と思い出は忘れません。また次のジャンルでも、新しいメンバーとともにこういったことができればいいですね。

最後に、原稿締切から発行までが遅れてしまい本当に申し訳ありませんでした。さすがに最後のクイズ大会優勝者の小説を挿絵なしにするわけにはいかなかったので……拙いながらもお楽しみいただけただけなら幸いです。

奥付

書名…ひなゆめファンの止まり木・合同小説本 Vol.11

発行責任者…双剣士 (<http://soukenshi.net/mail/>)

発行日…2017年10月1日

